

## 内 容

\* セルフヘルプを志向して

社会福祉法人ひつじ 理事長 藤田 安

\* 社会福祉法人ひつじの新たなスタート

社会福祉法人ひつじ 大田 佳代

\* 考えることと感じること

社会福祉法人ひつじ 松下 愛

\* 事務局からのお知らせ

第 12 回イタリア地域精神保健視察研修ツアー参加者募集のお知らせ 他

\* セルフヘルプを志向して

社会福祉法人ひつじ 理事長 藤田 安

### 1. はじめに

私たち「社会福祉法人ひつじ」の活動を振り返り、一寸したまとめをしておきたいと思います。

それというのは、精神保健福祉交流促進協会の活動が、谷中先生の逝去後、その先を模索した数年が過ぎ、長野理事長を中心とする新体制が動き始め、長野新理事長の挨拶に続く流れを受け、尾道、出雲の動きと近況報告がされたからと言えます。この流れに従って、私たち法人の活動状況や現在大きな課題となっていることなどについて、ご報告させて頂くのが自然なものと思いましたが、そのようにさせて頂きたいと思います。ただ、長野先生の所を初めてとして、各地の活動には歴史という重みを感じさせるものがあるのに対して、私たちの法人の活動にはその重みはなく、必ずしも時間的経過がその重みに比例するとは思いませんが、まだまだ底の浅い活動に留まっているのが事実です。この辺りは如何ともし難いものであること、ご理解下さいますようお願い致します。

### 2. 活動の始まり

私たちの法人は、今でこそ社会福祉法人と呼ばれる法人になりましたが、4年前までは、「特定非営利活動法人ひつじの会」として活動してきました。この特定非営利活動法人で活動を始めたのが、平成18年9月の障害者自立支援法の2段階施行の前段階施行に当たる待ったなしの新体系への移行に合わせてのことでしたので、心細くもあり、妙に高揚した気分でもあった、気持ちの中での始まりでした。しかも、それまでの医療法人が運営する「生活支援センター」の中での活動から離れ、全てを自分たちが1から始めなくてはならない状況からのスタートでしたので、何もない以上に、活動を進めるためには借金をして進めるしかない厳しい始まりでした。当時を振り返ると懐かしくもありますが、一種の覚悟をもっての始まりだったことを思い出します。

当時私たちが考え、思っていたことは、セルフヘルプ活動をどのように支援するかというものでした。それ

は、私たち法人の理念や中心的活動になるものを、どのような概念をもって行うかというものでした。当事者ではない私たちが当事者視点からの活動全体を視野に置き、利用者、職員の区別なく、お互いに助け合うことを目指そうというものでした。決して観念論に止まらず、あくまでもそれを実践することに大きな意味があると考えたわけです。これが始まりだったわけですが、職員といっても常勤3名に非常勤2名のたった5名の寄せ集めのこの始まりでしたから、職員の総意によるものだったかというそうではなく、私、藤田の極めて個人的な経験からのそれでしたので、そのことについて、ちょっと触れておかななくてはなりません。

### 3. 「生活支援センターいろいろ」の運営を巡って

私、藤田が25歳の時、「やどかりの里」で働きたいと谷中先生に申し出たのが、始まりの始まりということになります。そのころ私が感じていたことは、現在もあまり違うものではありませんが、その感じたことを表現する方法やそのために用いられる言葉は随分変わったとは思いますが、そもそも、何故「やどかりの里」で働きたいと思ったのかということをお話しなくてはなりません。それは、開拓者精神というべきものを「やどかりの里」に感じたからと言っていいでしょう。私という人間の一つの癖とも特徴とも言えますが、人のやらないことをしたくなることや、敢えて苦しむことをしたくなるというのが理由だったと言えます。違った言い方をすると、「やどかりの里」が魅力的なものと思えたとも言えますし、私に価値あるものと感じたとも言えます。しかし私は「やどかりの里」で谷中先生たちと一緒に活動し始めたのかというと、谷中先生曰く、『職員を雇えるお金はないので、近くにある民間の単科精神科病院でPSWを探している。そこで採用されればそこを活動拠点としてあとは一緒に活動できるから、』というお返事でした。私はそれに従って、その民間病院の2代目PSWとして働き始め、「やどかりの里」と私の関わりは、週1日の研修を受けることに加えて、頻繁に「やどかりの里」に行き、利用者、職員と交わるようになったのでした。

こうした私の経験が、かつて漠然としていた「仲間として、一緒に助け合うこと」こそがとても大事なことで、これを大切なこととして活動を続けていこうというものになって、「セルフヘルプ」を基調にした支援の在り方を進めるようになっていきました。

「生活支援センターいろいろ」は、平成13年4月1日から、先に述べた民間の精神科病院が運営する、当時の5類型化されたその5番目の「精神障害者地域生活支援センター」として活動を開始しました。私が施設長で、若手新人が2名、あとは年配の非常勤職員、という構成メンバー、「ここで何が出来るのか」。約20年埼玉で生活していた私が、静岡に移っての生活の始まりと同時に活動開始の時期でもありました。元々環境変化に順応するのが苦手な方にとって、まるで異文化の中で生活するような感覚に何時も囚われ、実際のところは、頭の中で思ったり考えたりすることと、行動とが不一致になる場合が多くなるのを恐れて、積極的に活動するどころではありませんでした。このような私の心境を話せるようになったのはそのころから大分時が経ってのことでしたから、若者たちへの関わり、特に個別支援をどう充実するかといったことを伝えたくとも伝わらないということは頻繁に起きていました。こうした諸事情から、私は、新人が一定の時間を経てあれこれ学ぶまでは、「生活支援センターいろいろ」の活動を積極的に、特に外に向かって行うことは極力控えるようになっていました。



平成 13 年開所当時



平成 18 年  
NPO 法人ひつじの会設立当時

「セルフヘルプ」どころか、私も新人たちも、自分たちのことで精一杯だったのです。それから数年は鳴かず飛ばずの時がありましたが、既に時代は、障害者自立支援法によって障害者の生活支援が取りざたされるようになっていましたので、心穏やかな時は殆どないまま時代の流れに巻き込まれていくことになりました。転機が訪れたのは、障害者自立支援法の施行日が伝えられたところからとっていいでしょう。私はじめ「生活支援センターいろいろ」で働く者は、彼是のお願いや注文を医療法人に対して行って来たのですが、この先は、自分たちが経営や運営など全てに渡って、決定とその決定したことへの責任を引き受けなくてはならない日が近づくに連れ、不安と緊張が日々高まっていくのを感じながら、一方では、身の引き締まる思いで襟を正しその時を迎えようとする一種の覚悟が私たちの中に芽生えてくるのを感じるようになりました。

#### 4. 法人として活動する

私たちは、「生活支援センターいろいろ」が行っていた事業を、新体系下でもそのまま事業継承する道を選びました。選ぶといっても、相談支援事業と地域活動支援センター事業を行うことにしただけで、今日では日中活動系、特にその中でも就労系の事業を選ぶこともできたのですが、「生活支援センターいろいろ」の運営にかけた私たちの思い入れは相当なものだと今でも思いますので、それ以外を選ぶことは考えませんでした。それというのも、拙速に支援を開始すると悪循環に巻き込まれるだけでなく、偽解決の片棒を担ぐことになり

易いことや、独り善がりな熱心さのために支援が空回りすることや、気が付いてみると、利用者一人一人の気持ちに添って支援をしているつもりになっているだけで、実のところは、当の本人の置かれた状況や胸の内にある心裏腹な感情や物事の決め方にあまりにも能天気な私たちがいることに気付かされることになったというわけです。

私はじめ私たちを間違いなくあらゆる幻想や願望から解き放ったのは、容赦ない現実の経営という問題に直面させられたことだと言えます。ちょうどこの時期、一緒に活動していた年配の何人かと袂を分かť経験をするようになりました。私たちは確実にリアリスティックに物を受け止め考えるようになった一方で、私たちの敏感に反応する感覚にはある傾向があると気付くようになりました。本来、何に価値を置くかの判断をする行動原理には、それに由来する思考内容、思考形式等にその基調を求めることが出来るものですが、私たちの判断の仕方は、ある種の直観に基づいて、それを行うことを深く自覚するようになりました。少数派としての自覚です。この自覚をより鮮明なものにしたのが、発達障害を持つ人たちとの関わりでした。彼らに触れることが多くなるのに従って、私たちが若い時に感じていた生き辛さと同じ感覚を、20歳前後の発達障害を持つ彼らから強く感じるようになったからです。発達障害の彼是に触れるのは、いま求められていることではないと思いますので、ここで多くを述べるつもりはありませんが、「類は友を呼ぶ」とはよく言ったもので、私たちの法人の多くの職員は、少数派であり、積極的に発達障害と言えないまでも、その傾向にある人たちだからです。

私たちの法人に集うことになった職員の多くが少数派に属するからと言って、そこに大きな意味を見出したと強調するつもりはありませんし、少数派故に辛い思いを今まで充分したはずなので、マイノリティーへの理解を深めることを希望しようなどとも考えていません。しかし、現実を直視すると、マイノリティーとしての位置を持っていることを知らなくてはなりませんし、それを知ったうえで現実を生き抜く知恵や工夫を学習しなくてはならないことは、言い過ぎても足りないほど知っておかなくてはならないことだと思うようになったこ



生活支援センターいろいろ  
(平成 20 年)

とがあります。

法人の未来を考えると、どうしても、今ここで述べているマイノリティーの問題を避けては通れないからです。少数派は少数派のままでいいし、少数派だからと言って卑屈になることを受入れようとする必要もないからです。そのままでもいいからです。しかし、圧倒的多数の、いわゆる普通の人たちとは何処か何かが違うという経験を私たちがしたように、マジョリティーの人たちもそれを経験することになるから、何が起きるのか、何が起きているのかだけは知って置かなくてはならないと考えています。それは、マイノリティーという側面を持ってはいるものの、たまたま職員という立場に立つ人とたまたま利用者の立場に立つ人との違いはあっても、同じ性質を持つ者同士が助け助けられという関係をどのように作っていくかという、本質に関わる課題を内包しているからです。職員だから利用者を支援するのが当たり前ではなく、利用者だから職員の支援を受けるのが当たり前ではない、相互支援の関係を日常の生活の当たり前な姿とは認め難く、受入れ難い、風潮に私たちが、慣れ親しんできてしまっているということへの意識の問題とも言えます。ここで「同じ性質を持つ者同士」という表現をしたのは、職員であろうが利用者であろうが立場性の違いに目を向けるのではなく、目の前にいる一人一人の人が持っている個性や持ち味をそのまま受け止めることこそが大切なことであって、「属性」で人を区分けする見方が入り込むことへの恐れを常に感じているということです。しかし、「同じ性質を持つ者同士」だからこそ、そのことを声高に言うのではなく、そのことを静かに受け止めていくことがとても大事なことになるという意識をも持って互いを尊重し認め合う態度を大切にしようとする、次元の異なる二層からなるメッセージを発信することも大事なことになると考えています。

「セルフヘルプ」の胎動を予感しながら、私たちがいま通っている道は、かつてビデオで見た「ソテリア」の人たちの遣り取りや「サンジャコモ」の人たちの遣り取りから感じられた、その人が確かに生きているという肉感とその場に醸し出される雰囲気やを彷彿させるものだと思っています。

## 5. 現在行っている事業

私たちは、「生活支援センターいろいろ」が事業を開始した当時から、キャッチメントエリアについて、静岡県西部の中遠と呼ばれる、磐田市(人口約17万人)、袋井市(人口約9万人)、森町(人口約3万人)の人口約29万人の人たちが暮らす地域を対象にサービス提供を行うことを考えていました。ところが、磐田市で事業を行っていた「たんぼぼ共同作業所」は、障害者自立支援法施行前に法人格取得を断念し、家族会運営の事業所から手を引き、私たちの法人に運営のすべてが譲渡されることになったり、掛川市で事業を行っていた「メンタルサポートみこち」も、介護保険下の主要な事業から切り離し、医療法人から土地を除く建物および備品と運営に関する権限など一切を、私たちの法人に譲渡されることになったりして、東遠地域と呼ばれる地域を含めた中東遠地域と呼ばれる、掛川市(人口約11万人)、菊川市(人口約4万人)、御前崎市(人口約3万人)を加えた人口約47万人の地域で暮らす人たちを対象に事業を行うことになっていきました。こうした事情は、私たちの地域に特別起こったことでなく、全国的に見るとあちこちで起こったことだろう想像しています。盛んに町村合併が行われた後の障害者福祉の在り方が矢継ぎ早に行われていった時期でしたから、在り方先行の大風呂敷を広げ、今なおその実現に向けて邁進しているというわけです。

現在行っている事業と特徴を以下簡単にまとめました。

- ① たんぼぼ共同作業所(磐田市)就労継続B14名、就労移行6名、定員20名の統合失調症の人たちが多く利用している事業所です。生活で不要になった物の片付け、農耕作業を中心に行っています。
- ② 学舎いろいろ(磐田市)就労継続B14名、生活介護6名、定員20名の統合失調症の人たちが多く



利用している事業所です。内職、軽作業が中心で、現在、買い物代行の事業化の準備をしています。

③ 生活支援センターいろいろ(磐田市)相談支援のみを行う事業所ですが、学舎いろいろ内で相談支援業務を行っています。

④ 学び舎あいまいもこ(袋井市)生活訓練10名、就労移行10名、定員20名の発達障害を持つ人たちが多く利用している事業所です。パンの製造販売、農作業、軽作業を行っています。お昼ご飯は、職員と一緒に自分達が食べるものを事業開始からずっと続けています。



学び舎あいまいもこ増築中

⑤ はたらき(袋井市)就労継続B14名、就労移行6名、定員20名の発達障害、知的障害の人たちが多く利用している事業所です。お弁当の製造と宅配を行っています。レストラン開店にあと一息の所まで来ました。

⑥ 生活支援センター袋井いろいろ(袋井市)相談支援事業と地域活動支援センター事業を行っているところです。袋井市からの委託を受け、主に統合失調症の人たちの居場所提供を行っています。

⑦ メンタルサポートみこち(掛川市)就労継続B14名、就労移行6名、定員20名の統合失調症の人たちが多く利用している事業所です。生活で不要になった物の片付け、草刈り、お弁当の製造と宅配を行っています。

⑧ 生活支援センターいつでも(掛川市)現在は、生活支援センター袋井いろいろ同様の掛川バージョンの事業を行っています。平成30年4月からは相談支援事業を残し、メンタルサポートみこち同様の就労継続Bと就労移行の定員20名の事業を開始する予定で進めています。



生活支援センターいつでも移転先

⑨ 居処どこでも(御前崎市)就労継続B14名、生活訓練6名、定員20名の統合失調症の人たちが多く利用している事業所です。事業開始から数年経ちましたが軽作業が中心で、流れに取り残されてしまうのではないかと気掛かりな事業所です。

⑩ 生活支援センターいつでもおまえざき(御前崎市)御前崎市から委託を受け事業を行っているところです。生活支援センター袋井いろいろの御前崎バージョンです。居処どこでも同様、気掛かりな事業所です。

以上が、現在行っている事業全体を書き出したものですが、お気づきのように、東西に渡って広く分布しているのが特徴です。一つの事業を大きくしなかつたことが一番の理由で、職員、利用者含めて関わりが荒くなることを防ぐことに主眼を置いたからです。その代わりに運営はとてきつくなることが予想されましたので、一つ一つの事業所を経営者の感覚をもって運営できるようにすることを優先課題にして、それぞれの事業所の施設長以下数名は、請求は勿論のこと経理上の仕訳が出来るようになって貰うことを行い現在に至っています。

各事業所はそれなりの特徴を持っています。前述のことに加えもう一つ早い段階から取り組んできたことは、下請けに甘んじず、事業を開拓していこうということでした。私たちの取り組みは、まだまだ不十分であって、働いて厚生年金の掛け金を払えるだけの収入を挙げられる人は、利用者にはほんの僅かなのが現実だからです。本格的にお金を稼げるよう事業開拓に力を入れなくてはならないと思っています。

## 6. 課題について

生活支援の3本の柱が一時よく話題に上ったことがありますが、生活の場の提供、グループホームの運営に、やっと名乗りを上げる時が来ました。平成30年4月1日事業開始を目指して、現在、磐田と袋井に、定員7名ショートステイ2名の施設をそれぞれ建設中です。同時期の事業開始を行うべく現在施設建設が始まった「えひめ」と名付けた就労系の就労継続B10名、就労移行6名、生活訓練6名、定員22名の発達障害を持つ人たちの一般就労に繋げるための事業所を開設する予定で、目下、進行中です。私たちの法人は、このような施設整備をあと幾つか行わなくてはならないと計画しています。どうしてかという、静岡県の特徴だけなのかどうなのかは分かりませんが、自分たちが守備範囲としたところは最低限それに見合うものを提供できる努力をしなくてはならないと考えるからです。人口47万人が暮らす地域に、私たちのように精神保健福祉を生業とする法人はたった一つしかなく、知的障害を持つ人たちを受け止める事業所が多いのに比べると、悲しくなってしまうほど、そもそも事業所がないのです。これは何とかしなくては、と思いつけている大きな理由です。

最後になりますが、私たち法人の持つ特徴について、先に、少し触れましたが、そのことに付いて、どのように課題として受け止めているかというお話をしなくてはならないと思っています。発達障害を持つ人の社会性をどう育て行くかという課題への取り組みと同じ課題を、職員と呼ばれる人たちもすることになると感じているからです。

そもそも社会性を育むと一口に言っても、人の成長、発達には、先行する身体的成長に、精神的成長が後を追って進んでゆくもので、体験を取り込み内在化された行動は、常に先行刺激の取り込みと内在化を行動の原理として学習を繰り返すことになって初めて、人になっていくものだとして理解されます。この先行刺激は必ずしも、与えられるものだけでなく、本人が求めることもあるわけで、単純に、先行刺激があつて、次に必ず反応が来るとは限らないわけです。しかも、先行する刺激の取り込みは、単に、取り込みが行われるだけでなく、取り込み後フィードバックされ次なる行動様式の取り込みの準備に進むともいえることが繰り返され進んでいきます。この入れ子状態で進む行動変容は、入れ子になったものをまた入れ込んで二重、三重へと変容を繰り返し、人の成長を促すこととなります。

そこで、私たちが何を学んだらいいのかは、定型発達との比較において、どの辺りで躓きが始まったかを知るところからなるわけですが、私たちもその自覚がないことには、理解が生まれず学習すること自体、何を学習するとどのような変化が起こるのか、そのことを知ることが出来ないこととなります。

発達障害を持つ人たちを通して強く感じることは、感覚レベルの知覚と、認知との区別が殆どないことです。しかも、認知することは必ずフィードバックされ、感覚レベルの刺激として残った記憶から再生されないと認知するというにはならないのですが、その記憶を辿ることがなかなか難しい場合が多いことを経験することになります。このような認知の問題は、単純に記憶に問題ありとは言えないような気がしています。私たちが社会性と呼んでいる本体が何処から来るかという、人の成長過程の男の子は男の子同士、女の子は女の子同士、互いに「群れる」その時期に、何となく、ある雰囲気を通して、気付くことだと言えます。もちろん個人差もあれば、その気付きの早い遅いもあるわけですが、この「何となく」「雰囲気を通して」とい



袋井グループホーム建設予定地



磐田市グループホーム建設予定地



磐田市就労訓練系事業所予定地

うのが、幼少期からの幾つかの課題を越えてとも、幾つかの危機を乗り越えてとも表現される発達課題を乗り越えた時に、「阿吽の呼吸」を知るようになるわけです。もっと、俗っぽい言い方をすると、「大人のウソに気付けるようになる」とも言えますし、人が成人するころには「清濁併せ持つ」ことの不自由さにも慣れていくことになるとも言えます。

ここに述べたようなことを、当の障害を持っている人が知って、再学習に励むことを支援するのが職員の専らの仕事ではなく、似たり寄つたりの経験をしながらも、片や障害者と呼ばれ、もう片方では職員と呼ばれることは、一旦棚に上げて、人と人が向かい合って、「誰が生徒か先生か」という世界を大事にしたいと思っています。後退気味の公助に代って、共助が取りざたされるに従って、俄かに登場し始めた「共生社会の実現」が強調されようになりました。一般市民をはじめ、ボランティアや近隣有志による「相互支援の一般化」に見られる動きは、一見「セルフヘルプ」を連想させる姿に見えますが、私たちの気持ちの内にある過去から受け継がれてきた「人間的価値観を共有」しているか否かを見極めないと、私たちの心がますます貧しく浅いものになっていくことを危惧せずにはられません。それだけに、注意深く、過去、現在、未来を、そしてその流れを鳥瞰的に、私たちの直観を信じて、進まなくてはならないと思っています。

#### \* 社会福祉法人ひつじの新たなスタート

社会福祉法人ひつじ 大田 佳代

平成 29 年 2 月 3 日、県庁から施設整備事業の内示が出たという電話がありました。ここから社会福祉法人ひつじは、新たにそして大きく動き始めました。この施設整備計画は発達障害の方を主な対象とした就労訓練系事業所と精神障害の方を対象としたグループホームの 2 つ、準備開始から数年が経っていて法人とすると念願叶ったというところでした。ただこの電話を受けた私は、うれしい気持ち以上に、本当に始まってしまい、どうなるんだろうと不安とも心配ともいえない気持ちでした。それでもグループホームは NPO 法人ひつじの会設立当初から事業計画に掲げ続けていたことでしたので、やっとその時が来たと思ひ直し、建築準備に取り掛かりました。その数か月後の 6 月 27 日、またもや県庁からの電話で、私の気持ちは一瞬にしてどこか遠くへ飛んでいきました。もう一つ申請していたグループホーム整備の内示が出たという連絡だったからです。3 つの施設整備、しかもそのうち 2 つは手掛けたことのない生活施設です。果たしてこれが現実か、無理・・と思いました。3 つの施設整備を同時にやることになったら大変だと冗談交じりに話していたことが現実になってしまったのです。こうなったらやるしかない、それが今の流れ。と言われればその通りで、こんな素晴らしいことはないということはわかります。でも、そうはいつでも頭と気持ちはバラバラです。「社会福祉法人ひつじ」が動きはじめて 4 年、法人の将来につながるとても重要な時間がいま動いています。

平成 13 年、生活支援センターいろいろの始まりと同じくして私の社会人としての生活も始まりました。当時の私は「働くこと」の前に自分自身が何を思い、何をしているのかを意識することすら出来ていませんでした。だから対人援助の仕事なんて到底出来るはずもありません。今もなお「いろいろ」で仕事を続けることが出来ているのは、私のへんてこさを否定することなく、つきあい、受け入れてくれる人や環境のおかげです。平成 18 年 10 月障害者自立支援法の施行により、生活支援センターいろいろの活動、そこで働く私たちの気持ちも大きく変わりました。法制度はもちろんのことですが、それより医療法人から独立、NPO 法人を立ち上げ事業を運営することになったということがなによりも大きなことでした。職員わずか数名の法人ですが、労務、給与、税金のことなど組織として成り立つためにはありとあらゆる手続きがあることをはじめて知りました。その時は、ここ数年乗り切れば、ひと段落すると言いながら日々がんばっていました。そこか

ら10年、生活支援センターいろいろ一つだった事業は少しずつ増えていきました。活動のエリアも内容も大きく拡がりました。10年前、自分が当事者と一緒にたい焼きを焼くことになるとは考えもしませんでした。振り返ってみればわずか15年ほどの間の出来事です。今までは前だけ見て突っ走ってきました。ここからは本格的に社会福祉法人ひつじとして地域に根を張るべく活動が始まったと感じています。事業が増えるとともに職員も利用者も増えています。職員同士でお互いの顔を知らないということも出てきています。大きな法人では当たり前のことかもしれませんが家族経営のように活動してきた私たちには未知なる世界です。目の前にいる人たちと一緒に、それぞれが出来ることを精一杯やるということは忘れずにいなければいけません。私自身としては、頭の中を新たなモードに切り替え、安定した基盤を持った組織ができるように地道に活動を続けていかなければいけないと感じています。

## \* 考えることと感じること

### 社会福祉法人ひつじ 松下 愛

仕事を始めてから、10年が経とうとしています。生活支援センターから始まった私の仕事は、社会福祉法人の立ち上げ、就労支援事業所「はたらき」の開設、そして運営と私に様々な試練を与えてくれます。

今回、RPJニュースの原稿を書く機会をいただき、私の頭の中で起きている出来事を纏めておきたいと思いました。というのも、教育のおかげで何とか社会性を保っているものの、私の立ち振る舞いは挙動不審で、どうしてこうも不自然な人間になってしまったのだろうと常々感じていました。仕事で出会った利用者、職員、たくさんの人、著書、それらを通して今、私の中で変化が起き始めているように思えるからです。ニュースの原稿にふさわしいかどうかは疑問ですが、宜しければお付き合いください。

社会福祉法人が設立され、はたらきの運営が始まったところで、私の心は消えていました。所長には「脳が1つ死んだ」と言ったのを覚えています。今思えば、私は感じたことを上手く認知出来ず、再生できないのだと思います。『考える』という行為によって代替していたので脳が1つ死んだという表現になったのだと思います。私の中にはマグマのような湧き出る衝動があって1つの脳がそれを認識していました。それがなくなってしまったのです。その瞬間が自分でも分かるほどあっさりです。それからは残った脳を使って生活することになりました。困ったことに何をしたいのか分からなくなりました。さらにしなければいけないことだけをして過ごしていました。失った脳を取り戻したくて、普段しないようなことを試したりもしました。そうこうしているうちに、はたらきの運営は慌ただしくなります。利用者も職員も増え、人と向かい合う場面が増えました。話をすること、本を読むこと、一緒に何かをすること、様々なところでぶつかり合うことも増えました。その中で私の心は声を上げるようになりました。その声をそのまま表現出来たら良いのですが、それが上手く出来ません。考えることが癖になっている私は、心を頭の中に入れてしまわないと表現することが出来ないのです。そして、それではそのままを表現していることにはならないということに気が付きました。今、私の心は頭の中ではなく別の場所にある気がします。おそらくそこが元々あった場所なのだと思います。

仕事を始めたときは、崖から突き落とされたような衝撃があって、目の前の世界がガラリと変わりました。私は今もその世界を見ています。今、私に起きている変化はそれとは違い、雛が卵から孵るようなものでも、蟬が羽化するようなものでもありません。もっとゆっくりとしていて、後になって、あのときから変化が始まっていたのかもしれない気が付くようなものです。

一旦姿を消した私の心は収まるべき処へ収まろうとし、私の頭はそれを受け入れるための準備をしている



ところでは、体はそれに従い、本来、人がする自然な振る舞いをするようになるのではないかと予想しています。

考えに囚われた私は、外から見れば割と勝手に生きてきたように見えるかもしれないけれど、ようやく自分の人生を生きられるような気がしています。もっと自然に人と付き合うことが出来たら、あたりまえのことがあたりまえに、助け合い、協力することがこんなにも簡単なことだった。尊重することもされることもこんなにも身近だった。そう感じられるよう、一日一日を大切に生活していきたいと思っています。



## \* 事務局からのお知らせ

### ① 第12回イタリア地域精神保健視察研修ツアー参加者募集

既にご案内しておりますが、例年通りイタリア視察研修ツアーを実施します。詳細は最終ページの案内書をご覧いただきたいと思いますが、アレツォ・ヴァルディキアーナ・ヴェローナ・トリエステと視察・研修します。

イタリアでは近年司法精神病院の廃止を進めており、ヴァルディキアーナではそのための受け入れ態勢が進んでおり、今年はその実施状況が確認できるものと思われまます。一般精神病院が無くなり司法精神病院も閉鎖に向かっているイタリアをご自身の目で確かめてみませんか。ご参加お待ちしております。

期間 2017年11月20日(月)～29日(水)10日間 全研修通訳付き  
参加費 39万8000円(シングルルーム使用は+7万円)

※空港諸税・燃油サーチャージは別途ご負担ください。

参加申込書はホームページよりダウンロードしてご使用ください。

### ② リフレッシュセミナーin 帯広・十勝参加者募集中

期間 2017年9月16日(土)・17日(日)

参加費 5,000円、懇親会参加費 5,000円

会場 帯広市西6条南6丁目3 ソネビル2階セミナールーム

詳細はホームページの案内書をご覧ください。

参加申込書はホームページからダウンロードしてご使用ください。

### ③ 本年度会費納入済みの方へのお知らせに関して

既にご案内しております通り、ホームページ・会員のページで会費をご納入頂いた皆様のリストがご覧いただけます。(会員ページに入るにはパスワードが必要です)



—編集後記— 「日本の精神保健福祉の縮図のひとつ」今回の感想です。大切な時期にあります。つい先程、韓国から帰国しました。日本の自立支援法～総合支援法がどれだけ大切か再認識しました。全国すべてに行き渡る可能性があるからです。すべての地域で、支援がないと現状は打破できません。韓国で、素敵な方々と沢山出会い、学び、刺激的な時を過ごしてきました。また報告します。まだまだ私たちがやるべきことがあります。ゆっくり取り組みたいと思います。(長野)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会 TEL090-1811-7119

2017年

# イタリア

## 地域精神保健視察ツアー



2017年第12回イタリア地域精神保健視察ツアーを実施します。  
今年も例年通り、在宅ケアのアレッツォと、そのモデル地区ヴァルディキアーナ、研究都市ヴェローナ、そして精神保健の聖地トリエステを訪ねます。

【研修概要】最初にアレッツォを訪問します。フィレンツェの近くトスカーナ州にあるアレッツォは、一昨年我々の招聘で来日し講演されたダルコ先生のホームグラウンドです。在宅ケアを中心に精神保健医療が発展した地域で、保健センターや緊急病院を視察する予定です。次に在宅ケアの実践地であるヴァルディキアーナを訪問します。昨年司法精神病院閉鎖の実践活動も始めている地域です。次にイタリア精神保健研究の中心地ヴェローナでは、同じく一昨年日本で講演されたヴェローナ大学ブルチ教授からイタリアの最新情報を伺います。そして精神保健センターやセルフヘルプ活動の視察を予定しております。最後にイタリア精神保健の聖地といわれているトリエステ訪問です。F・バザーリアの活動から精神病院を閉鎖したイタリアの象徴であるトリエステでは、精神病院跡地であるサンジョバンニ地区視察と精神保健センターや緊急病院等での視察研修を予定しております。

この機会にイタリアの地域精神保健の視察研修に参加してみませんか。ご参加お待ちしております。

期間：2017年11月20日(月)～11月29日(水) 10日間 全研修通訳付き

参加費：39万8000円 (シングルルーム使用は+7万円)

航空運賃・宿泊・研修・通訳費含む。空港諸税・燃油サーチャージは別途ご負担ください。

募集人数：12名程度 ※申込み10名未満の場合は催行中止となります。

申込み締切り：10月10日(水) (定員になり次第締め切りとなります)

スケジュール (研修は全て通訳が付きます)

11月20日	月	羽田発→経由地(ミュンヘン)→フィレンツェ空港	アレッツォ泊
21日	火	アレッツォ視察・研修	アレッツォ泊
22日	水	ヴァルディキアーナ視察・研修	アレッツォ泊
23日	木	アレッツォ→ヴェローナ移動	ヴェローナ泊
24日	金	ヴェローナ視察・研修	ヴェローナ泊
25日	土	ヴェローナ→トリエステ移動	トリエステ泊
26日	日	トリエステ・サンジョバンニ地区視察	トリエステ泊
27日	月	トリエステ視察・研修	トリエステ泊
28日	火	トリエステ空港→ミュンヘン→29日(水)羽田着	機内

※往復の飛行機やイタリア国内移動・宿泊地・研修視察日時等は変更になる場合があります。

※ホテルはツインルームを2名で使用して頂きます。(シングルルーム使用は追加料金が必要です)

企画 特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会

Email ref-pj@mx5.ttcn.ne.jp

HP <http://www2.ttcn.ne.jp/ref-pj/>

Tel 090-1811-7119